〔辨内侍日記下〕建長三年正月十七日、〇中略すけやすがもとに、圍碁講ねきのふのあるまいらせよといふ心、うたによみてやれとおほせごと有ければ、少將内侍おりくに、

こけのむすのやまのおくのふもとにてこれを□□みをへてかへりけん

返し中將

ふるさとのはなの盛をもろともに□□□□みましむかしなりやと

なほせめにやれと仰ごと有しかば、辨内侍、

ふる里のはなよりもけにおもひやれそれよりおくの玄がの山ごえ

〔古碁樞機敗〕この古碁樞機は、年久にわが家に傳へぬる書にして、遠つ祖筭砂上人よりして、代々の名高き人達の、後のよまでもつたへぬる圍碁にして、更にまたたぐひなきふみなり、おのれ朝ゆふこれをとり出て、そがまゝをまねびかこみ見るに、その妙なること、たえてびとのおもひよるべくもあらぬ手どもなんおほかりける、玄かるに今かゝる靜けき大御よにあひて、たれもたれも此ことを明暮のなぐさとして、をのゝえもくだすばかりたのしみ物する時なれば、かくてひめおかむもいとあたらしく、はて〳〵はかぐつちのあらびにもあひ、玄みの住がともなりぬべきに、こたび彼上人の二もゝとせのむかし玄のぶむしろに、つらなれる人にもわかち、ひろく人のめをもおどろかさむとて、板にゑらせつることゝは成ぬ、

文政五のとしの春　　本因坊元丈しるす

〔新撰碁經大全〕當流碁經大全序

圍碁は其來る事ひさしく、古賢これを翫ぶ者おほし、本朝本家深く秘して其圖をいだす事をゆるさず、世に圍碁の書多しといへども取にたらず、一日門人來て懇に其圖を求む、予辭するを得ず、策元直傳を以て此書をあらはす、妙術至極に於ては、口授に非ざれば喩べからず、その器によ